

石仏幻想の路

—三遠信にキリシタン文化を探して—

春日井 眞 英

1. はじめに

長野県松本市の近くに牛伏寺（金峰山 牛伏寺 真言宗）という寺がある。ここを訪れたのは全くの偶然だった。神社探訪をするために、塩尻インターを出て乗鞍方面に行こうか、穂高方面にしようかと迷っていた最中に『牛伏寺』という案内板が眼に飛び込んできた。「牛」が「伏せる」寺と書く「牛伏寺」、そのネーミングの不思議さに惹かれた。

何ともいえないこの寺の名前、「牛」という言葉に頭の中の何かが反応した。長野と言えば「善光寺」であり、善光寺と言えば「牛」が絡むからである。思い返せば、筆者はすでに「牛」に導かれていたのかも知れない。いつものように、古い神社の祭神を確認し、資料館などを廻り、文献蒐集を行うつもりで松本方面に向かっていた矢先である。牛と寺の関わり、なぜ、ここに牛が？という疑問が頭の中を駆け回った。どういう関わりがあるのだろうか？。たいした寺ではないかも知れないなどと反芻しながら向かうことにした。しかし由緒書きには驚くものがあった。

寺伝によると、

天平勝宝七年（755年）唐の玄宗皇帝が善光寺へ大般若経六

石仏幻想の路

百巻を納経の途中、経巻を積んだ赤・黒二頭の牛が、この地で同時に斃れ、その使者たちが本尊十一面観世音菩薩の霊力を知り、その経巻を当山に納め、二頭の霊を祀って帰京しました。この不思議な因縁により寺号を牛伏寺と改め、参道途中の牛堂に阿弥陀仏を中心に、赤黒二頭の牛像をまつています。

古来より牛伏厄除観音と称し、厄除霊場として県内外に知られ、また、信濃三十三番中第二十七番札所となっており、法燈寺千三百年を今日に継承いたしております。

と、あった。この寺に大般若六百巻がもたらされたと由緒書きにある。天平勝宝七年に先立つこと二十年前、天平七（735）年は、遣唐使玄昉、吉備真備が種子島に帰り着いた年でもある。年代的に考えて、この経典は彼らとも関わりの深いものかも知れない。しかし、大般若六百巻は本来、善光寺に納めるといふ初期の目的があったにもか関わらず、この寺に納められた背景が十一面観音の霊力とされているが、何か込み入った事情もあったのかも知れない。さらにこの寺には聖徳太子四十二歳の時の作と伝えられる聖観音像が祀られているそうだ。信濃国観音霊場、二十七番札所として知られているという。唐からもたらされたという般若経典六百巻を運びながら、この地で息絶えたという牛二頭。経典を運ぶ使者達はこの寺の十一面観音の霊力に畏れて、

石仏幻想の路

経典六百巻をこの寺に納めて戻ったとされている。その経典を運んだという、赤と黒の牛の霊が祀られている牛堂、しかしこの堂の中心にあるのは阿弥陀仏というのは善光寺を意識してのことだろうか。石段を進み、山門から本坊、如意輪堂そして仁王門を潜ると観音堂（本堂）に行き着く。何気なく観音堂、奥の院、弁天堂、聖徳太子殿、厄除けの鐘樓の脇で眼にしたものは、高さ一メートル二十センチほどの地蔵である。幅も約一メートルほどのかなり大きな地蔵であった。案内板には江戸時代に寄進を受けたものとあった。しかし詳しいことはそれ以上はなかった。地理的背景を考えてみると、この松本平界隈は交通の要衝の一つと見ることができるところだ。中仙道が近くにあり、日本海側、太平洋側のほぼ真ん中あたりに当たるのだ。中仙道は古来より重要な交通路であった事は周知のごとくである。だが、唐より伝来したという経典はどのように運ばれてきたのだろうか。それについては、寺伝では判らない。中仙道伝いであれ、天竜川伝いであれ古来の道筋を考える上で興味深い。

2. ピエタとの出会い

そろそろ本題に戻ろう。筆者を驚かせたのは、江戸時代に寄進されたという子安地蔵であった。高さ約一メートル二十センチ、横幅八十センチほどのこの地蔵を眼にして出てきたのは「ピエタだ!」という言葉だった。

「ピエタ!」という言葉が一瞬にして出てきた。いや、「ピエタ」にしか見えなかった。構図、形式は違うが強烈な印象があった。地蔵とか石仏などと言う言葉は、そのときには必要なかった。形状が異なる、子供の位置が左右違う。あるいは宝珠が一方にはあるではないかと指摘されるかも知れない。しかしこの石像は「ピエタ」にしか見えなかったのである。筆者自身「ピエタ!」と思いながらも「あり得な



(1) 牛伏寺境内の地蔵



(2) 岐阜県立美術館のピエタ

い」と言う相反する考えが頭の中を巡っているのに気がついた。だが、木曾路（中仙道、ここでは木曾路という表現を用いたい）には「マリア観音」あるいは「マリア地蔵」と呼ばれるものがいくつもある。ここ松本は、木曾路を抜けたところだ。大桑の宿を始めとして奈良井の宿など木曾路にはマリア地蔵、あるいはマリア観音と呼ばれるものが散在している。直接、眼にしたこともあるが、印象は微妙だった。牛伏寺のピエタほどの強烈さを持つものは、他にはなかった。木曾路の



(3) (大桑 妙覚寺のマリア観音影絵は『村の石造文化』(大桑村教育委員会による))



(4)(5) 大桑 妙覚寺のマリア観音



大桑の宿の妙覚寺で見たマリア観音には、幾つもの疑問が残った。はたして観音なのか。左手に十字架を持っているから、マリア観音と説明されており、確かにそのようには見えるのだが、どうして観音に分類できるのかという疑問が残った。左手の十字架は理解できるとして、右のものが何かとは考えることはできなかった。何かが見えなかったのだと思う。十字架状だとは見えるが、それ以上は見えなかった。

何か細かいことにこだわっていたのだろう。それが、見えた。全く偶然のことから、それが「イエズス会の紋章」の一部では?と気がつくにはだいぶ時間が必要だった。石像の右手にあるのは、イエズス会の紋章の中央にある十字架とHではないかと。そうすると観音像とされるものの謎が一つ解けることになる。さらに、石像の手の数であ



(6) イエズス会の紋章

る。六人分の手である。さらに石像の右脇に(大桑 妙覚寺のマリア観音)彫られている十と言う字だが、これをクルスと見ることはできないだろうか。現物を見、映像でも確認してあるが、強調された輪郭は他の字と異なるのである。もし、クルスと見なしうるならば、六と、やや判別不明な字が残る。この文字を「尤」と判読してみたい。「十六尤(?)人」と読めないであろうか。「尤(ゆう)」はすぐれている。つまり、石造の手の数をも合わせて十二人の選れたものと解することができる。キリストと十二人の使徒、あるいは志を同じくするものがここにいるとする暗示かも知れない。偶然かも知れないが、この石像には強力なメッセージが込められていることになる。また、この観音の原型が千手観音か十二面観音なのかも知れないところである。牛伏寺での体験は、まさに「目から鱗」の世界であった。単なる石の地蔵(あるいは石造)ではなく、これを「ピエタ」に重ねることによって幾つもの世界が広がって来たのであった。こういう見方が可能であれば、これまでの石仏の見方は大きく変わることになる。石仏は、

仏教的領域に立つものだとする視野にこだわっていた事になる。地藏だという思い込み、形状から観音ではないかとする視点を少し移していく過程で生じたものは、これまでの領域の再検討だった。あたりまえのことが、「当たり前」ではなかったのだ。人間のしたたかさが常にある事に気がつかなくてはいけないと改めて認識した。あたりまえのこの中に、実は「当たり前でない」ものが潜んでいるのだ。生きるためのしたたかさが気がつかなくては面白くない。考え方を変えるには、当たり前で終わってはい何と変わらないのだ。

『村の石造文化 石造物調査報告書』(前掲書)によれば、このマリア観音には天保三(1832)年の銘が入っているという。様式から十一面観音にも、千手観音にも分類できよう。また銘文をもつ石造の中で野尻区の観音菩薩が最も古く延宝年間(1673~1683)のものである。地藏菩薩の古いものは貞享(1684~1687)でありこのうち幾つがマリア観音あるいはマリア地藏に分類されるのかは微妙なところかも知れない。

ところで、注目しておかなくてはならないことが一つある。それは、この石造が野尻川向に在ったものを昭和四十六年に現在地に移設したと説明文にあることである。その野尻川向がどのようなところだったのか不明な点である。路傍の石造としても、地域の中でどのような位置を占めていたのか興味があるところである。



(7) 大桑・天長院
マリア地藏

大桑には妙覺寺・マリア観音のほかにも、天長院の山門前にマリア地藏がある。寺の中に入っていないことが興味深い。寺が引き取ることを拒

否したからなのか、何か言われが有ったのか考えさせられる。石造の子供の大きさは四〜五ヶ月ぐらいだろうか、影像よりもわかりやすさを重視して前掲書中の作図^⑧を示しておく。資料によると、高さ50センチ、幅27センチだという(図の右に記されている五十は高さを、横棒線下の27は幅を表すという)

この大桑の資料によれば「安産地藏・馬頭観音」^⑨と言う項目がある。細かいことが解らないのだが、この図にある地藏が、子安地藏という分類ではなくマリア地藏と分類される経緯を知りたいところである。奈良井のものは、右に位置する子供の手に十字架があると見立てられている。それに比較すれば、ここには十字架に見立てるものはない。ただ、袈裟の前の筋が三本有るのが気になるところである。それは、イエズス会の紋章のHの字の下に見える草のようなマークに重なるのである。マリア観音の方では台座の下に、そのような痕跡をわずかにだけ見ることはできる。

3. 三遠信の石造物に眼を向けてみる



(8) 笠寺のキリシタン灯籠

木曾路に、マリア観音、マリア地藏がいくつかある。言うことはすでに述べた。しかし、東海地方のことは意識して見てこなかった。キリシタン灯籠と呼ばれるものがある事を知っている程度だった。栄国寺(名古屋市中区)と笠寺(名古屋市中南区)、小牧市岩崎山のキリシタン灯籠は眼にして

きた。しかし、石造を
そこまでのものと意識
はしていなかった。そ
のような中で、撮りた
めてあった影像の一部
に眼が留まった。浜松
市細江の幼子を抱く石
像である。表情といい、
光背もなくスポンと切



(9) 浜松市細江・東林寺

りだされたかのような石造の異質さが気になった。浜松市細江、銅鐸
資料館の脇にある東林寺の山門の前に並んだ石仏の一つがそれであっ
た。子供を右脇に抱える仕草は、牛伏寺のものとは頭の位置が異なる
が、子供が落ちないように立て膝をしているかのように見える。しか
し、憂いを含んだ顔は嬉しげに子供を見守る母のものではなかった。
さらに不思議なことは、この石像は寺の外に置かれていた。山門の外
なのであった。これは、いくつかの場合と酷似してくる。つまり、寺
の境内地でないことである。このことはいくつかの石造にも当てはま
る事象であり、無視できない問題であると考ええる。

北設楽でも、路傍にこの種のものを見ることもある。設楽町神田^{かだ}
周辺では三十三観音
の第一番札所にあり、
かなり苔生している。
置かれていた場所にも
よる。だが、子供
を抱いている姿はよ
く解る。大桑長野の
天長院のマリア地蔵



(10) 設楽町 神田

も山門の外にある。もちろん路傍の石像もこの範疇に入るのだが、初
めから寺の境内にあるのは珍しいことかも知れない。設楽町田峰の田
峰観音の駐車場脇にある、三十三観音の中にも子抱き観音が一体ある。
この石像も厳密には境内の外と言うべきであろう。境内の外と云えば、
細江の東林寺の石造も同じである。

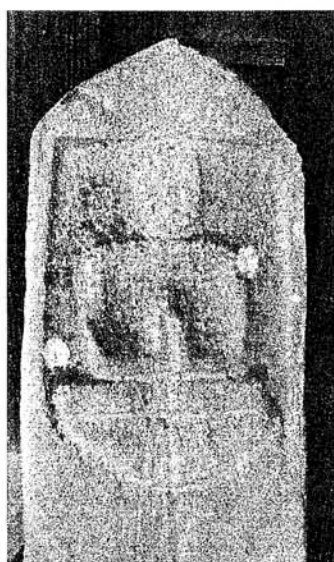
この東林寺の石造を見て、「ピエタ」に見えるという仲間もいた。だ
が、ピエタにしては子供が小さすぎる。素直に子安、子供の成長を願
う子安観音と見ればすむのかも知れない。だが、「子安」という言葉
には、どうも妊娠（子授け）、安産の意味合いが強いように思われる。
日本的な子安神となれば、木花開耶姫^{こはなひらくよめ}になり子供を授かることを願う
ことが多いようである。このことは『古事記』あるいは『日本書紀』
の瓊杵尊^{にぎのきみ}と、木花開耶姫の間での一夜孕の話を考えれば、子授けと
言うことは理解できる。仏教的世界の中では、鬼子母神^{きしぼじん}（ハリティー）
を考えなくてはなら
ないが、これは多産
を暗示してくる。し
かも、観音の場合三
十三観音の中に子安
観音は入らない。ま
た、子安地蔵も子安
観音も子供の健やか
な成長の守り手とし
て広く民間では受容されている事は知られている。岩崎敏夫^{いさざき ともお}によ
ると子安地蔵と、子安観音には地域性が見られるという。これに絡んで
注目したいのは福島県地方に多いとされる十九夜の月待ち信仰である。
中心となるのは観音であり、子供を抱いた観音像も見られるという。
隣接する相馬地方では二十三夜待ちになり、女性達の講が組織されて



(11) 田峰 三十三観音の中

いたという。つまり十九夜待ち、あるいは二十三夜待ちの女人講の背景が問題となってくる可能性がある。しかし、『民間信仰辞典』（桜井徳太郎 東京堂出版 昭和55年）によれば、十九夜待ちとは安産祈願であり、Y字型の犬塔婆や狼の産見舞いなどと言って、三峯山では年に一回、狼の居そうなところに食べ物を置いてくれることがあったという。そのためこの問題は、広範な検討を要するとされている。同じく二十三夜講では祭神は勢至菩薩、阿弥陀三尊、月天子、月光菩薩、月読尊などと考えられていたとし、単純に女性だから観音と結びつけることにも問題がある。だが、岩崎は子安神として十九夜観音（いわき市）の例をあげているが、二十三夜待ちの方では相馬市の子安神と安産の小枕、麻を提示している。千々石到は『日本史大事典』第四卷（全七

巻 平凡社 1983）「月待ち」の項で月待講は月読尊をまつるとされるが、中世の月待板碑の場合、本尊は月天子の本地仏である勢至菩薩やそれを含む阿弥陀三尊が本尊である事がほとんどで、近世の月待塔の場合も、十九夜は如意輪観音、二十六（ママ）夜は愛染明王を本尊として刻むことが多く、神道説に基づいて塔が建てられることは多くない、と記している。なお、「子安」には子授け、妊娠の意味合いが強かったと考えられるのだが隠れキリシタンが礼拝した聖母子像とした辞書もある^⑩。



⑫ 名古屋市昭和区 尚文寺
木曾路界限
でいわれる子
安観音が聖母
子像（マリア
観音）に見立
てられている
のは、多くの
場合石像にク
ルス（十字架）

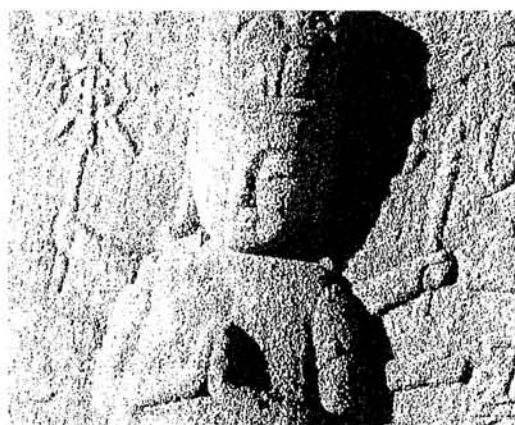
が彫られているからである。だが、十字架にどこまでこだわるべきだろうか。十字架は分かりやすく、宗門改の詮索を受けやすいことは否定できない。だが、巧みに十字架が隠されていることが意識できたのは名古屋市昭和区尚文寺の記事を見て、訪れて拝見させていただいたときである。台座と合掌している手のところを含めて横に二本の線があり、それを縦の線で結び十字架と見なしていると、言う。このような視点で見れば十字架を有している石造は、以外に多く存在するのかも知れない。

だが、筆者には、この種の十字



⑬ 設楽町神田 田代

架の存在は、あまりにも単純に思えてならなかった。大桑の妙覚寺のように十字架に、思想性が込められているべきではなかったかと考えている。秘められ、通常には分からないような工夫があると考えたい。もちろん、これも精一杯の表現であったのかも知れない。愛知県設楽町神田田代の石造も、台座に注目し、その連の花びらの数を考えて見ると「三」という数値が意識される。普通ならば台座全体を八枚の連弁が彫られているはずだが、前の方の三枚分しか見えないのである。つまり「三」という象徴性が提示されていると考えるのである。先に触れた、大桑 野尻の妙覚寺のマリア観音（天保三年 1832）の持ち物を考えて見ると、像の左側の剣で突き刺されているかのように見える。その剣の束が「十字」と見える。また、先に触れたように右手の



(15) 安曇野市金比羅神社参道脇 観音像(別角度)

持ち物、イエズス会の紋章の中央部と解すれば、錫杖といいわげができるが信仰の証として見ることは十分だと考える。

実は、この形状は安曇野市にもあった。安曇



(14) 安曇野市金比羅神社参道

野市金比羅神社参道の石仏群の中にあつた一つがこれである。左手にしたものは、大桑の妙覚寺のものと同じである。右手のものは、巧みに錫杖化させているが輪の中に見えるものは同じであり、宝冠に化仏は彫られず三つの山状のものがある。これもイエズス会の紋章の下部の印だと読み解きたい。

大桑の妙覚寺の文字の解釈がどうかと言うことは別として、石造の手にした持ち物は、仏教系の石造のものとは明確に異なることになる。(15)の図は、(14)図の安曇野市金比羅神社参道のものを拡大したものである。右手の錫杖の中にも左のものと

同じ十字架を見て取ることができる。単なる錫杖ではなく、越斧でもなく、さらに化仏のいない宝冠の「三」枚の飾りに注目していけば石造に秘められた象徴性が浮き上がってくることになる。ところで、「剣」を胸に刺すと言う話はシメオンの預言、「マリヤの七の悲しみ」に繋がっていく。つまり、大桑 妙覚寺のマリア観音は、ルカの福音書が大きく作用しているのを見ることができるのである。筆者は「十字架」だけで事が済むようなものだとは考えていない。石造の、中にはもっと深い宗教的意識が配されていたのではなかったかと考えている。



(16) 細江・東林寺・参道脇・聖観音



(17) 細江 東林寺内部の庚申像 左手の十字架



(18) 細江 東林寺脇石像・三叉戟

4. 子供を抱く僧形の石造

子供を抱く石造は、何も観音像だけではない。東三河の山の中。北設楽郡東栄町月のもは僧形であった。調べてみると、このほかにも子供を抱いたものが、この地区にはさらに二体、また少し離れた地区などでも幾つかあることが分かった。だが、「なぜ僧形なのか？」が謎となった。何故ならば、この近くには鳳来寺があり、その開祖であるという利修上人が山で修行中に、その尿を舐めた鹿が女の子を産み落とすというエピソード（和泉式部と足袋の話 柳田国男）が知られている。いくつかバリエーションがあるが、子供のいない額田の長者が観音様に子授けのお願いしたところ、鳳来寺へ行けというお告げを聞いて駆けつけ、赤子は長者の下に引き取られ、後の和泉式部となっ



(20) 東栄町 月 老平

豊橋市在住で、北設楽界隈の石仏研究をされている伊織俊夫^⑩氏や東栄町在住の竹内正純^⑪氏ら、多くの方々のご協力、ご教示によって判明したことは設楽町、鳳来町（現・新城市）、東栄町界隈には、年代は分らないものの子抱きの石仏が約二十体ほど散在していると言われている。年代などの彫り込みがなく、見た目での比較しかできないものが圧倒的だが、東栄町粟代^⑫の桑山のものには、嘉永三年、嘉永四（1851）年の銘があっ

たという。その種のエピソードが背景に有るのかとも考えて見た。だが、それならば、もっと古いものがあるべきだということになる。しかし、シメオンの話を考え合わせると、この石像はイエスを抱き上げた抱神者としての姿に見えてくるのである。石造に見る満足げな表情、感謝を秘めた姿をシメオンとみたい、それは筆者だけの願望だろうか。僧形にして、袈裟を纏っている姿は、エルサレムの神殿で奉仕している事を聞いた日本人の理解の賜と言いうことができる。



(19) 東栄町 月 引田

た。ここで問題とした石造は、遡っても1801年の享和元年から、嘉永の範囲のものではないかと考えらるるのである。宗門改の影響が各地に飛散した結果のことではなかったかと考える。大桑のもの



②1 東栄町・栗代・桑山
嘉永3年の銘文を持つ
子抱き地蔵

のは天保三年(1832)であり、北設楽の石仏群とも年代的には大差ないと考えることができる。明治、大正のものには名前が書かれていないものもあり、地区によっては具体的な奉納者も判明できる。ただ、明治期のものにあっても路傍の石仏の一つであり、その家から離れたところに祀られていた。これは、その集落の境界外と言うことを暗示させてくれる。だが、東栄町地内に限ってみても、子抱きの地蔵が多い。どうして、そうなのかは判断が付かない。

筆者は、大桑 妙覚寺のマリア観音についてその意匠から三信遠各地で散見した石造について見解を述べてみた。つまり、石造の中に、仏教的ではない思想が存在すると考えたい。そして、石造の意匠の中に、教義に対する昔の人々の意識を見ることが少しはできたのではないかと自負している。子抱きの石像の意味を、地蔵に重ねながら救世主イエスを信



②2 東栄町 尾呂 明神山

じた人々の気持ちと自分たちとを重ね合わせた古の人々はどういう思いで、手を合わせていたのだろうか。さらに、憤怒相の庚申などにも昔の人々の気持ちは読み取れる。

子抱きの石仏に関心を持ちだした頃、

「この種の石仏は、地域性を持っているのでしょうか？」

と、聞かれてぎくりとしたことがあった。「地域性」、「多いとか少ない」という「多寡の問題」を意識していなかった迂闊さを指摘されたかの感じがあった。だが、東栄町、設楽町界隈だけを限ってみても数字の上では、全体的な石造に比較すれば、少ないと言わなければならない。だが現実的印象は、「多い」のである。庚申、馬頭観音、三十三観音や三界萬霊の碑、そして墓地付近での六地藏などの間で眼にする程度なのだが、それでも、見ていくと数こそ少ないものの、多いと感じざるを得ない。それは、意識することからのかも知れない。

子抱き地蔵は、やはり僧形のものであろう。だが、東栄町 月のものは、ちょっと異なる。幼子を見やるその姿には、安堵の表情を感じると言ってもいい。ところが、次第に若い地蔵が子供抱く姿が眼に入るようになる。子供を抱く石造には、剣や十字架は見ることはできないが「子供を託す」という見方は可能になるのである。つまり、子授けである。ならば、「子安」であって構わなかったことになる。だが、前掲書の『鳳来町誌 金石文編』には「子安」の項目はない。しか



②3 東栄町 月 清平寺
鬚を付けている石像

石仏幻想の路

し、写真は残っている。鳳来町 与良木^{よらぎ}の長泉寺にあった子安観音、さらに鳳来町 名号ハマイバにも「文政二^じ年（1819）」の銘文を持つ子安観音を、『鳳来町誌金石文編』十八頁に二体見ることができが、長泉寺のものは紛失している。また、『豊田市の石造文化財』では地蔵は三百五十体、観音は二九九体の個体調査がなされている。だが、子安に絡む観音は波岩安産観世音菩薩（平戸橋宗像神社北西）の一つだけで、後は馬頭、十一面、聖観音、三十三観音、思惟観音などである。地蔵は、子安地蔵が9体、子育て地蔵1体、抱き地蔵1体、水子地蔵1体、おもかる地蔵2体、お助け地蔵1体。勝軍地蔵1体などと分類されているが、子抱き地蔵などは圧倒的に少ない。ただ、日待ち月待ちの石造が二体あるのは興味ぶかい。特に、「日待ち月待ち」の問題は、先に述べた女人講などの問題とも関連して来ることになる。



04 設楽町 平山 名清古

このように見てくると、絶対数として子安観音や子安地蔵は奥三河などでも少ないと言わなければならないが、平地部と山間部の違いなどが問題となる可能性がある。子供を育てにくかったと言う背景がそこに出てくるのか、それとも子供を持つ石造を通しての心情表現の可能性も否定できない。設楽町、豊田市足助地区、さらに稲武地区の子抱き地蔵を見れば、子授け的な要素もあると言える。だが、東栄町月などのものを見てくると、比較することの難しさを感じる。そこにはなんらかの文化の土着化する前の姿を見ることができると考えられるのである。

先に牛伏寺のところで述べたが、木曽路、梓川、安曇野市界隈の石造と、

東三河、遠州のものとを比較検討して見ると手持ち物が共通していると言わることができる。ただのクルスではなくH型のクルスである。さらに、蓮華座の全面に彫られる三枚の連弁などという手がかりは、三位一体の思想性の象徴となる。

また、庚申の石造にもこの種のものを見いだしうることは、木曽路と三河地方とを「信仰」で結ぶ手がかりと見なすことができることになる。

三遠信を結ぶ旧街道筋は中仙道、木曽路などと密接に関わっている。これら本街道は「塩」という経済的な移動だけではなく、華蔵寺、鳳来寺、善光寺、諏訪、立山、白山へと信仰を繋ぐ道でもあったことを考え合わせる必要があるだろう。さらに、本街道の他に脇街道などの道筋を結ぶいくつもの古道があったことは確かである、天竜川あるいは、木曽川に沿ったり、道はいくつにも別れながら内陸部に展開し、



06 豊田市稲武 瑞光院 子抱き地蔵



05 豊田市足助・新盛子守岩 子抱き地蔵

飯田、伊那、御岳、埴尻、松本、諏訪などに繋がっていく。一見仏教的な石造でありながら、隠された十字架を手にした石造が、どのように展開しているのかは我々の視点の置き方次第であるが、地域・年代によって石造の意匠が微妙に変容していると考えられる事ができる。東栄町月地区のものが、仮に福音書のシメオンの話に基づいていたとしたら、若い僧形の地蔵は、その事を忘れた証拠かも知れない。豊田市の足助新盛、稲武の地に見る地蔵の姿は時代の中での変化の結果でもある。なお、石造の手にするクルスあるいは三叉戟については今後の課題としておきたい。



⑦ 梓川村 八景山「滝見堂（観音堂）脇の地蔵」
乳房を見え赤子を抱く

=====註=====

- ①『村の石造文化 石像物調査報告』木曾 大桑村教育委員会（増版・改訂）昭和52年（昭和47年）
- ②前掲書の作図（影絵）から43頁上。この図の方が、持ち物がよく解り、影像では微妙だからである。
- ③前掲書57頁下
- ④前掲書146頁 表最下部。文政期のものであるが詳しくは不明。（1818～1830）。気になるのは馬頭観音と地蔵が合体？していることである。

石仏幻想の路

（筆者未見）

- ⑤『国史大辞典』第6巻 吉川弘文館 平成九年（第1版5刷）
「子安神」の項目44～45頁によると、神道では木花開耶姫を祭神とするのは姫が火中であって三柱の神を無事に産んだ故事によるとし、仏教では子安地蔵と子安観音が多く、ことに西日本では観音、東日本では地蔵が多いと言われていると、地域性に触れている。さらに福島県いわき市地方の十九夜の月待ち信仰は観音であるとし、子を抱いた観音像も見られとする。そして『三代実録』貞観十八（876）年七月十一日条に「美濃国正六位上児安神」とあるのを初見すると記している。
なお、「子安」という項目では子安講、子安地蔵は出るが子安観音が記されていることは稀であり、『岩波国語辞典』第7版では、子安とは安産のことであるが、今では言わないと書いてある。そして子安地蔵の略とある。
- ⑥子安観音とキリスト教の聖母子像に触れているのは、『日本国語大辞典』（縮刷版）（第1版第9刷）小学館 昭和六十二年 であった。
多くは、幼児の息災を護るものとしている。
それらの中で、子安神に「鬼子母神」を挙げているのは『大辞泉』【第二版】小学館 2012（第二版第一刷）と『広辞苑』第五版 1998であった。
- ⑦名古屋市昭和区尚文寺で見つかった石仏。中日新聞2013年十一月八日朝刊市民版
- ⑧シメオンの預言。抱神者シメオンとも呼ばれる。救世主に会うまでは死ぬことがないと精霊に示されていたという。ルカによる福音書2:25-35に詳しい。幼子イエス・キリストを抱き上げた人物。キリストの誕生後、モーゼ律法による「清めの日四十日」が過ぎてにマリアがエルサレムの神殿に上ったときにシメオンはイエスを救世主と認めたとされている。
シメオンはマリアに次のように告げたとされている

石仏幻想の路

母人よ、あなたも剣で胸を差しつらぬかれる苦しみをせねばなりませんまい。

大桑の妙覚寺の石造を造った人々の信仰の証をこの剣に見ることができるといいたい。

⑨「マリアの七の悲しみ」は、シメオンの預言通りマリアが彼女の人生の中で体験する七の悲しみを指す。その一は剣で胸を刺すほどの悲しみから始まっている。

⑩子抱き石仏の資料を、始めにいただいたのは豊橋在住の伊織俊夫氏だった。彼と出会ったのは花祭の祭場だった。ザゼチ、などの切り草についていろいろと教えてもらった。そして、東三河界隈の諸々の石仏の調査研究をされていること、版画家でもあることを知った。手元に資料がほとんどなかったので伊織氏にお願いしたところ、詳細な地図資料と映像データをいただくことができた。伊織の資料によれば鳳来寺・海老周辺のもので10体。

⑪東栄町の中設楽在住の竹内正純氏のご協力の下で、東栄町教育委員会から資料を得ることができた。東栄町地内だけで約14体を数えることになった。しかし、町誌、群誌の石造、石仏などの分類はかなり大まかで、馬頭観音、観音、地藏、不動明王その他の天部、さいの神などとなっていて、筆者の探そうとする類いの分類に当てはまる項目が少ないといえる。これは、当たり前のことなのかも知れないが、分類の仕方自体をさらに細かくすることができれば、各教育委員会作成の分類表から引き出すことができたかも知れない。

⑫鳳来町誌『鳳来町誌 金石文編』鳳来町教育委員会編 昭和56年)によれば、石造の分類は(1)如来、(2)馬頭観音、(3)その他観音、(4)地藏・菩薩、(5)その他菩薩、(6)明王、(7)天、(8)祖師、(9)庚申、(10)供養塔、(11)道祖神、(12)田・山・地・水神、(13)その他石祀、としてさらに石灯籠、金属灯籠、鳥居、手洗い石、狛犬(狐)鰐口など他八種類の項目を指定している。ここで扱う

のは主に、1〜5あたりになると思われる。先の『鳳来町誌 金石文編』によれば如来は十四体 最古は貞享(1694〜)1体、元禄(1688〜)2体、享保(1716〜)1体、寛延(1748〜)1体、天明(1781〜)2体、文化、文政、天保(1804〜1843)各1体。安政(1854〜)1体、年代不詳2体などとなっている。

なお、馬頭観音は元文(1796〜)年間のものから始めて、全体数は122体、そのうち年代不詳は10体。そして明治・大正・昭和の年号を持つものが71体となり新しいものが多い。

その他観音は年代確認できる最古のものは貞享年間(1684〜1687)3体を始め元禄年間に9体(1688〜1703)以後宝永、正徳、享保と1体から3体を見るが、なぜか文久年間(1861〜1863)に34体、慶応年間(1865〜1867)36体と急増する。総数は262体、年号不詳は141体。個々の年代については触れないが、文久と慶応年間のその他の観音像の急増は興味深い。『鳳来町誌 金石文編』には、代表的諸観音の事例として、与良木の長泉寺の文化□年八月彼岸(1804)のものと、名号ハマイバ文政2年(1819)の子安観音像が掲載されている。だが、2014年2月長泉寺のものは現場では確認できなかった。これは設楽町清里の夏目順啓氏も後日ないことを確認されている。

⑬『豊田市の石造文化財』(豊田市歴史民俗調査報告書第1集)豊田市教育委員会 2003年。豊田市は、いくつかの町村と合併しているから、ここに示されているものが現状に合うかどうかは分からない。足助、稲武などでもいくつか筆者は確認していることを付け加えておきたい。